

第 1 学年保健体育科学習指導案

日時 平成 24 年 10 月 25 日 (木)

場 所 揖斐川中学校 運動場(雨天:体育館 2 階)

学 級 1 年 3・4 組 男子 31 名

授業者 川原 隆嗣

1 単元名 球技(ソフトボール)

2 指導の立場

(1) 単元について

運動の特性の面から

ソフトボールは、2つのチームが攻撃側と守備側に分かれ、規定回数内で攻守を交代しながら勝敗を競い合い、楽しさや喜びを味わうことができるスポーツである。攻撃側では、得点を奪うために、バットでボールを打ち、ホームランをはじめとする長打を打ったとき、守備側では、得点を与えないように、走者をアウトにさせたときや、ファインプレーをしたときに魅力を感じる。これらが、ソフトボールの一般的な楽しみの一つである。

ソフトボールの授業では、スローイングや捕球、バッティングの基礎技能の習得はもちろんのこと、その技術をゲームの中で活用し、いかに得点を取るよう攻撃するか、いかに得点を与えないように守るかが、重要なポイントとなる。また、ゲームの中では、自分の役割と動き・状況を即座に判断し、つなげる力も必要である。

集団の特性の面から

ソフトボールは個人技能と集団技能を高めながら行う運動である。集団で学習する場である体育の授業においては、運動する者と見る者との関係が深い。自分の動きがどのようになっていたかを自分で確かめることは非常に難しい。よって、お互いに動きを見合い、仲間同士で教え合ったり励まし合ったりすることで、自分の行った技を確認することができ、さらに練習の質を高めることができる。球技が不得意な生徒にとってはボール操作が思った通りにいかず、「見られたくない」という意識が大きく働く。そこで大切なのは「仲間ができる自分も嬉しい」という気持ちで学習を展開させていくことである。

ソフトボールは、技能の練習を行う際に必ず相手が必要になる。相互援助活動が活発に行われる学習集団を組織すると同時に、生徒に「できる」喜びを感じさせていきたい。

(2) 生徒の実態

本授業の生徒は1年3組男子16名、4組男子15名の計31名である。1学期に行った球技「バスケットボール」では6つのグループを編成し、仲間同士積極的に関わり合いながら、リーグ戦で勝利を目指し、お互いに高め合いながら学習することができた。

単元はじめに行ったアンケートは以下の通りである。

- | |
|--|
| ・あなたはキャッチボールをしたことがありますか（は い 30人 いいえ 1人） |
| ・あなたはバットを振ったことがありますか （は い 26人 いいえ 5人） |
| ・あなたは野球（ソフトボール）が好きですか （は い 20人 いいえ 11人） |
| ・あなたは捕球と送球のどちらが苦手と感じますか（捕 球 14人 送 球 17人） |

野球部または地域クラブに所属している生徒は8名である。運動の好きな生徒が多く、ほとんどの生徒は上達したいという願いをもって取り組むことができる。アンケートからもわかるように、キャッチボールではほとんどの生徒が恐怖心なく意欲的に取り組むことができている。しかし、中には、少し距離のあるボールや、自分の正面から外れたボールを捕球する際に、後ろにボールをそらせてしまったり、グローブを付けていない手で捕球しようとしたりする生徒もいた。本単元では「怖い」「苦手」と感じる生徒が、単元終了時に、「できた」喜びを感じさせるための手立てを工夫しなければならない。

3 研究主題との関わり

研究主題

学ぶ喜びを実感する生徒の育成 ～ 基礎的・基本的な知識・技能の習得と定着を図る学習指導を通して～

【研究内容2】

単位時間における指導の工夫（つまずきグループに関わって）

（2）生徒一人一人のつまずきに応じた指導・援助の在り方

個々の実態に応じた指導・援助の工夫

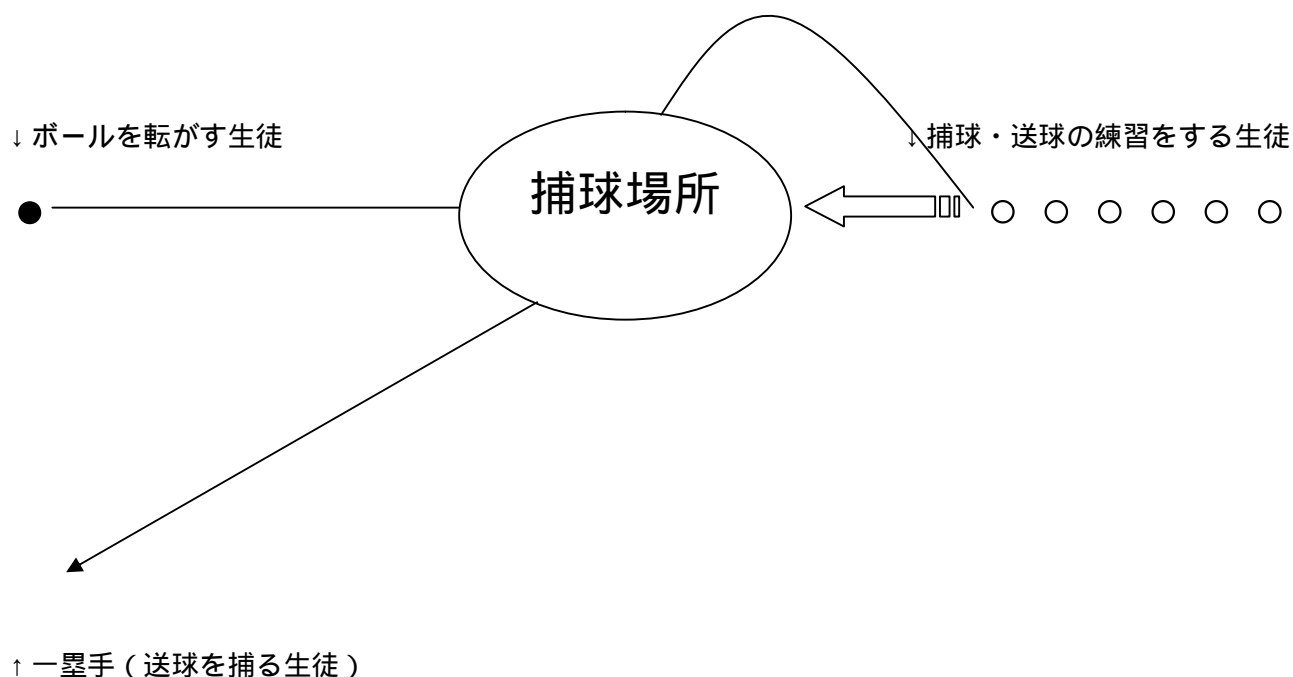
捕球の動作の中で、特につまずくと予想される生徒の実態は、グラブの使い方（捕球時のグラブの向き）と腰の高さである。つまずきの原因として、打球に対する恐怖心から、グラブを上から振り下ろすかのように使ってしまったたり、打球を、できるだけ距離のある上から見下ろそうとして、腰が引けてしまったりする動作が考えられる。本単元では、そのような恐怖心をなくすことで、より多くの生徒が基礎的・基本的な技能を習得できると考え、ソフトボールよりも柔らかいボールを用いた指導を行っていく。

また、送球の動作の中では、捕球と送球の一連の動作がうまくできず、思った所へ送球できないといったことが予想される。腰を落とし、両手でうまく捕球はできたが、そこから1・2・3のリズムのうち、1で腰を一端起こし、2・3で投げることは、捕球と送球が全く別の動作のようになってしまい、一連の動きの中で行えない。そこで本時は、打球の右側から入り、左足の前で捕球することで、次の送球の動きへつながるという技術ポイントを提示し、生徒の相互・援助活動の中で、1で捕球、2、3で送球といったリズムを習得させ、捕球と送球を一連の動作でできるように指導したい。

場の設定による指導の工夫

本時ねらいとする基礎的・基本的な技能を、生徒が習得するために行う学習活動は、グループを主体

としたゴロ捕球と一塁への送球の練習である。仲間が転がした比較的に簡単な正面のゴロを捕球し、一塁へ正確に送球する練習から始まり、次に正面のバウンドゴロ、左右のゴロと発展して練習する。そこで、よりねらいに沿った練習がグループ内で行われるよう、教師が事前にグラウンドにラインを引き、どの方向へボールを転がすのかや、どこで捕球するのか等を生徒が意識して練習できるよう指導したい。



4 単元目標

【運動】基本的なバット操作を身につけて打った打球に対し、正面で捕ったり、ベースカバーに入ったりして守るゲームができる。

【集団】技能上達のために、お互いに具体的に教え合い、励まし合いながら取り組むことができる仲間になる。

5 単元の評価規準

運動への 関心・意欲・態度	運動についての 思考・判断	運動の技能	運動についての 知識・理解
ソフトボールへの特性やゲームに関心をもち、仲間と互いに協力し、教え合いながら練習することができる。	練習やゲームを通して、自己の課題を明らかにし、その課題の解決を図ることができる。	基本的なバット操作を身につけて打った打球に対し、正面で捕ったり、ベースカバーに入ったりして守るゲームができる。	打ち方や走塁、ボール操作や定位置での守り方を理解し、ルールや審判、ゲーム運営方法を理解することができる。

<單元指導計画> (全13時間)

[illegible]

7 本時の展開（本時の位置 4 / 13 時間）

< 本時の目標 > ○ 捕球から正確に一塁へ送球することができる。

● 上手なプレーをした仲間を称賛したり、失敗した仲間を励ましたりできる。

過程	学習内容		主な学習活動		教師の指導・援助	
	○運動の側面	●集団の側面	○運動の側面	●集団の側面	○運動の側面	●集団の側面
計画	【用具の準備】 【ウォーミングアップ】 【全体計画会】 ○ 捕球から正確に送球することができる。 ・ 基本的な捕球 ・ 基本的な送球	● チームで声を掛け合い、きびきびと準備やウォーミングアップを行うことができる。	【準備、ウォーミングアップ】 【キャッチボール】 【全体計画会】 ○ 目指す姿を確認し、そのための課題と動きを理解する。 技術ポイント ・ 基本的な捕球 「膝を曲げ、腰を落とす」「両手を使う」 ・ 基本的な送球 「目標に向けてつま先を真っ直ぐ踏み出す」 ○ 練習内容を理解する。 【グループ計画会】 ・ P O 技術ポイントの確認 ・ M O どのようなアドバイスをかけるとよいのか確認		○ L , P O , M O , 用具係, ゼッケン係, カード係の役割が機能しているか確認する。 ○ 技能が優れた生徒や, 教師が示範演技する。 ・ 観る視点(技術ポイント)を示し意識させる。 ・ 示範の動きから気付いたことを発表させる。 ○ めざす姿を達成するための技術ポイントと練習方法を確認する。	● 素早く活動ができるグループを認める。 ● 「足幅が狭い」, 「腰が高い」, 「両手で」などの具体的なアドバイスの言葉を確認する。
	展開	【前半練習】 ○ 一塁送球(グループ練習) ・ 正面の緩いゴロ ・ 正面のバウンドゴロ ・ 左右のゴロ ・ 守備の基底技能の反復練習を行うことで, 正しい捕球の仕方, 送球の仕方を身に付けることができる。 【中間研究会】 ○ 自分の動きの中で, うまくいかなかったことを考え, 仲間の示範からポイントを再確認することができる。 【後半練習】 ○ 中間研究会で交流したことに意識して練習・ゲームができる。	● リーダー, M O を中心にすばやく練習できるように呼び掛けることができる。 ● グループごとにお互いに動きを見合いながら, 課題達成のための具体的な声を掛け合いながら練習することができる。 ● お互いの上達を認め合うことができる。 ● 失敗をした仲間に励ましの声を掛けることができる。	【前半練習】 ○ 班内でローテーションし, 練習する。 ・ ゴロを転がす→捕球→一塁へ送球 ・ 観察者は, ボールを捕球する人の正面, 横に立ち, 技術ポイントについてアドバイスする。 【中間研究会】 ・ 前半練習で高まった仲間の示範から, お互いに自分に取り入れるるとよいところを話し合う。 ・ 前半練習でうまくできなかったことについて交流する。 ・ 仲間の示範を見て気付いたことを発表する。 ・ 課題(技術ポイント)と後半練習の課題を確認する。 【後半練習】 ○ 打球の右から入り, 左足の前で捕球すると, 送球への動きにつながることを意識して練習する。 ○ ハンドベースゲームをする。 ・ 守備は内野のみで行う。 ・ 攻撃は手でバッティングする。		○ 捕球前の準備(構え)については, 腰を低くするよう指導する。できていないチームメイトには P O を中心に個別の練習が設けられるようにする。 ○ 打球の方向にすばやく動くために, 腰を落とし構えることを確認する。 ○ 正面にきた打球に対して, 両手で捕球することでエラーをしにくくなることを確認する。 ○ フライの捕球についてはすばやくボールの下に入ることが大切であることを確認する。
評価		○ 本時の課題が達成できたかを振り返る。	● 目指す仲間の姿になれたかについて, 振り返ることができる。	【グループ反省会・全体反省会】 ○ 課題の達成ぶりを評価し, 次時の目標へとつなげる。 ● 目指す仲間の姿の達成ぶりについて認め合う。 ・ 用具係を中心にグループごとに素早く後片付けを行う。		○ 本時の成果を確認し, 個人の技能の伸びを多く認める。 ・ 課題に関わって良いプレーをした生徒を意図的に指名し, 価値付ける。

評価規準

腰を落とした低い姿勢から、打球の正面に入り、両手で捕球し、正確に送球することができる。